



# 名取春仙が描く 鎌倉武士たち展

令和4年7月23日(土)～9月25日(日)



南アルプス市立美術館  
MINAMI ALPS CITY MUSEUM OF ART

☆ <sup>いま わだい</sup> <sup>かまくら</sup> <sup>じだい</sup> <sup>かぶき</sup> <sup>えんもく</sup> 今話題の鎌倉時代。歌舞伎の演目になっています。どのよ  
<sup>はなし</sup> <sup>しょうかい</sup> うなお話なのか、ここでは2つ紹介します。

## 特別公開 <sup>とくべつ こうかい</sup> <sup>かんとう</sup> <sup>だいしんさい</sup> <sup>えまき</sup> 関東大震災絵巻

<sup>ねん</sup> <sup>かんとう</sup> <sup>ちほう</sup> <sup>ちゆうしん</sup> <sup>おお</sup> <sup>じしん</sup> <sup>お</sup> <sup>かんとうだいしんさい</sup> <sup>じっさい</sup> <sup>けいけん</sup> <sup>な</sup> 1923年、関東地方を中心に大きな地震が起こります。関東大震災です。実際に経験した名  
<sup>り</sup> <sup>しゅんせん</sup> <sup>とうじ</sup> <sup>きろく</sup> <sup>かいが</sup> <sup>まきもの</sup> <sup>かん</sup> <sup>えが</sup> <sup>とど</sup> <sup>え</sup> <sup>とお</sup> <sup>とうじ</sup> <sup>ようす</sup> 取春仙が、当時の記録絵画を7mもの巻物2巻で描き留めています。絵を通して当時の様子  
<sup>そうぞう</sup> を想像してください。

## <sup>すけ</sup> <sup>ろく</sup> <sup>ゆかりの</sup> <sup>え</sup> <sup>ど</sup> <sup>さくら</sup> 助六縁江戸桜

舞台は、吉原(よしわら)遊郭(ゆうかく)。花魁(おいらん)「揚巻(あげまき)」の恋人「助六(すけろく)」は曾我五郎時致(そがのごろうときむね)という武士で、源氏の宝刀・友(とも)切(きり)丸(まる)を探すために吉原に出入りしています。

吉原で豪遊する「髭(ひげ)の意休(いきゅう)」という老人が、この刀を持っていることを聞き出し、奪い返します。

粋(いき)でいなせで喧嘩(けんか)も強い助六は、江戸っ子の理想像を体現したようなスーパーヒーロー。気風(きっぷ)のいい揚巻は理想の恋人。ただの憎まれ役でない大人の風格を感じさせる意休や、おっとりしているが、お茶目な一面も持つ白酒売(しろざけうり)(兄十郎(じゅうろう))など個性的なキャラが登場します。

助六のカッコよさや舞台の美しさを楽しむ、江戸っ子の美意識の集大成ともいえる作品です。

### 一口メモ！

普段よく目にする助六寿司は、この演目からつけられと言われています。助六寿司の「いなり寿司」は油揚げの「揚」で、「巻寿司」の「巻」と合わせて、助六の恋人「揚巻」となることから、江戸っ子の洒落で「助六寿司」と呼ばれるようになったそうです。

粋でいなせって、カッコよくって流行の先端をいっているイケメンのことだよ。今のアイドルといっ

紫のはちまき、黄色いたび、黒い着物から赤のじゅばんをちらりと見せて、さっそうと歩く姿が拍手かっさい！助六かさをパッと広げみえを切ります。



《十五代目市村羽左衛門 助六》



（尾上菊五郎 義経勸進帳）1940年

（松本幸四郎 弁慶勸進帳）1940年

（市村羽左衛門 富樫勸進帳）1940年

## 勸進帳(かんじんちょう)

兄である源頼朝(みなもとのよりとも)と不和になった源義経(みなもとのよしつね)は、山伏(やまぶし)に変装して、奥州(おうしゅう)平泉(ひらいずみ)の藤原(ふじわらの)秀衡(ひでひら)のもとへ落ちのびようとしています。

武蔵坊(むさしぼう)弁慶(べんけい)の他、四人の部下をつれて、義経一行がさしかかったのは、義経を捕らえるために設けられた安宅(あたか)の関(せき)。

関守の富樫(とがし)左(さ)衛門(えもん)は一行を疑い、山伏なら持っているはずの、東大寺再建のための寄付を募った巻物である勸進帳を読むように命じます。

白紙の巻物をあたかも勸進帳であるかのように読み上げる弁慶ですが、目ざとい番卒(ばんそつ)に荷物持ちの強力(ごうりき)が義経に似ていると気づかれてしまいます。この危機を脱するため弁慶は主人である義経を金剛(こんごう)杖(づえ)で打ちすえます。富樫は義経一行だと見破りつつも、弁慶の忠義(ちゅうぎ)に心を打たれ通行を許可します。

富樫が去った後、涙ながらに無礼をわびる弁慶に、義経は彼の機転をほめます。そこに富樫が現れ、無礼のおわびに酒をふるまい、これを快く受ける弁慶。義経一行を先に逃がして後、富樫に感謝(かんしゃ)して後を追うのでした。

この見どころは、なんとといっても、白紙の巻物を読み上げる弁慶と、巻物をのぞき見ようとする富樫との攻防と、正体を暴こうと厳しく問う富樫とそれに答える弁慶の激しい掛け合いです。弁慶と富樫とのやり取りは一瞬(いつしゅん)たりとも気をぬけない気迫(きはく)に満ちています。

また、主君に手をあげてまでこの場を乗り越えようとする弁慶と、義経一行とわかっていながら捕らえられない富樫の葛藤(かつとう)「飛び六方」(六つの方角、天・地・東・西・南・北へ手足を動かして、飛ぶようなステップで花道を駆け抜けるもの)と呼ばれる引っ込みまで見どころの多い、歌舞伎(かぶき)を代表する作品です。

勸進帳が白紙であることをかくそうとして中を見せない弁慶と、のぞいて偽物であると見抜きたい富樫のやり取りが見どころです。



南アルプス市立美術館  
MINAMI ALPS CITY MUSEUM OF ART

〒400-0306  
山梨県南アルプス市小笠原1281  
TEL 055-282-6600 FAX 055-282-6601